# 北陸石仏の会々報

**第68号**
令和4年12月15日発行
編集と発行
**北陸石仏の会**
（日本石仏協会北陸支部）
代表　平井一雄
〒939-1315
富山県砺波市太田
1770　尾田武雄方
電話 0763-32-2772
振替 00740-2-11974
（年会費 3000 円）
**ホームページ**
http://odatakeo.wp.xdomain.jp/

・理証院の石仏
・井波石工七次郎
・芦峅寺閻魔堂前観音
・移動明王
・第 63 回例会報告

## 理証院の石仏

滝本　やすし

### はじめに

理証院は現在の石川県金沢市寺町五丁目にあった真言宗寺院で、『加能郷土辞彙』（昭和十五年　日置謙）に次のように記されている。

**金沢野田寺町に在つて、真言宗に属してゐた。山号は法雲山。万治元年前田利常から屋敷を賜はり、諏訪大明神を奉祀してその別当であつたが、明治元年神仏混淆禁止の後諏訪神社となつた。亀尾記に毎年七月廿六日祭礼、殊に夜三光待を行ふとある。**

理証院は金沢二十四地蔵霊場（通称犀川霊場）の第十一番札所であり、金沢阪東（坂東）三十三ヶ所観音霊場の第二十七番札所であった。明治初頭の神仏分離の際に廃寺となり、諏訪神社として残された。理証院で行われていた二十六夜待ちは、諏訪神社の三光さん神事として現在も続けられている。

廃寺となって散在した理証院の石仏を尋ねてみたい。

### ①石川県金沢市豊穂町　天台宗観音寺

観音寺の脇堂に等身大の丸彫り地蔵立像が納められている。理証院にあった金沢二十四地蔵霊場の第十一番札所地蔵は長らく行方がわからなくなっていたが、理証院から数キロメートル離れた観音寺の地蔵であることが、二十年ほど前に市内の郷土史研究家の調査によって確認された。

### ②石川県金沢市寺町五丁目　浄土宗浄安寺

諏訪神社（理証院跡）の斜め向かいにある浄安寺境内の覆い堂内に三十四体の観音が並べられている。石材は泥岩あるいはそれに近い細粒の砂岩であり、犀川の川石と思われる。細部まで美しく彫られており、石工の技量の高さがうかがえる。また多くの個体に彩色の跡が残されている。三十四体のうち、三十三体観音に属するものは十数体ほどと思われ、七観音に属するものが十体ほどである。また他の観音の像容はどちらにも属しておらず、詳細な尊名は不明である。滝見観音の光背に天保二年銘が確認される。堂の右手前には凝灰岩製の角柱型石塔が建てられており、次の銘文が刻まれている。

正面　「観世音菩薩」
右側面　「坂東■廿……」
「……」（御詠歌かと思われる）
左側面　「天保三壬辰歳五月　理証院現住　賽光代」
「明治二巳年六月　理証院……」
裏面　「坂東二十七番　三十三体　密誉代」
「観世音菩薩　當山　安誉…」

石塔に刻まれた銘文によると、天保三年に理証院の賽光によって造立され、明治二年に理証院の密誉から二十六番札所であった浄安寺の安誉へ三十三体の観音が渡されたことがうかがえる。観音の台石には近隣の他の寺院名が刻まれたものもあり、観音も全てが理証院から移されたものかは不明である。

**③石川県小松市粟津町　高野山真言宗大王寺**

大王寺境内の地蔵堂内に、石材や手法が浄安寺のものと酷似している観音が三体みられる。当初から大王寺に造立されたとは考え辛いことと、浄安寺の三十三体観音に欠損している像容の三体であることから、理証院より移されたものと考えられる。理証院から三十キロメートルほど離れたこの寺院に、どのような経緯で移されたのであろうか。残念ながら、記録や伝承は残されていなかった。

**おわりに**

真言宗理証院にあった石仏が、天台宗寺院、浄土宗寺院、そして遠く離れた真言宗寺院へ移されていたことは驚きである。

明治初頭の神仏分離の際に廃寺となった寺院は数多くあるので、他の寺院の石仏の行方も尋ねてみたい。

①観音寺の地蔵

②浄安寺の３４体の観音

②浄安寺の多羅観音

②浄安寺の准胝観音

②浄安寺の瑠璃観音

②浄安寺の滝見観音

③大王寺の阿耨観音

③大王寺の普悲観音

③大王寺の施薬観音

②浄安寺の石塔

# 井波石工　七次郎

尾田　武雄

井波石工の存在については井波町編『井波町肝煎文書目録　古文書』（昭和六十年刊）に「町中末々困窮に付助成願書」（三〇頁）が載せられ『井波町史下巻』（一一三頁）に全文転載されている。享保一八年（一七三三）三月に仁右衛門他二〇名が肝煎・組合頭・算用聞に対し、石山希望者に一五〇匁の役銀とひきかえで採掘させたものである。以後採掘権は、特定の人に与えられ売買の対象になった。それから延享元年には砺波市三合新の千光寺石塔が建立され、「石工井波善太郎」の銘が刻まれている。天明五年（一七八一）には、新たに石山を開き、北川村の石屋善太郎に一年銀二十匁で採掘権を与えた。文化三年（一八〇六）には「石工四人御座候」（『井波肝煎文書』）とあり、文化七年（一八一〇）には石山の採掘者は、甚右衛門、かじ屋又兵衛、義右衛門、清次郎、平蔵がいる。（『井波肝煎文書』）

南砺市井波の隣地区に砺波市庄川町金屋がある。ここは石仏制作の祖とされる庄兵衛が越前国の石工について仏神彫刻の修業をしたのが文化十四年（一八一七）とされ、一生の間に一千体の石仏を作った明治の名工がいて、石仏の里のような感があるが、金屋石工より先行して井波石工がいたのであろうと想像できる。

石仏に関しての在銘は、南砺市今里の神明宮に不動明王があり背面に「井波石工七次郎」「慶應二丙寅年正月」とあり幕末期の製作である。また南砺市福野の曹洞宗準堤寺には、秋葉大権現、金比羅大権現、不動明王を刻んだ石龕があり、横に「作井波石工七次郎」「慶応二年正月」（現在は、お堂に入り確認することができない）がある。また高岡市戸出町四丁目には坐像ながら高さ二四〇センチ、幅一二四センチの通称「デカ地蔵」といわれる阿弥陀如来坐像が大きいお堂に安置されている。お堂の前には石柱に「南無古中大地蔵菩薩」と彫られ、やはり石の由来板によると「安政六年（一八五九）から文久二年（一八六二）にかけ当地方に疫病が流行して止まることを知らず多数の病死者をだした。特に幼児が多く其の悪病退散を祈願し且供養の為に、古戸出村左官三吉　中之宮村桶沢又七が発起して大地蔵尊並びに尊堂の建立を呼びかけ町内住民競って浄財を持ち寄り井波町石工七次郎に石仏を依頼した。慶応三年（一九二三）五月大石坐像を完成した」とある。井波石工七次郎は慶応年中頃に活躍した石工である。この幕末期から明治期にかけて、砺波地方では石仏の造像がされるようになる。

南砺市福野準堤寺　石龕

高岡市戸出町四丁目　デカ地蔵（阿弥陀如来坐像）

南砺市今里神明宮　不動明王

# 芦峅寺閻魔堂前西国三十三所観音中の三面観音

平井　一雄

## 1、閻魔堂前の石仏群

富山県立山町芦峅寺閻魔堂前には約５０基の石仏群がある。

上段に十一面観音を中央に左右に三体の六地蔵が安置されている四段のひな壇がある。基壇下部には石塔下部残欠、板碑、地蔵等が安置されている。

二段、三段には西国三十三所観音と思われる石仏が安置されている。三十三所観音の内、三番、二十番、二十一番、二十六番、二十八番が不明である。

二段目中央の上部が斜めに欠損した三面観音は番数部分は欠損しているが三面で馬頭面があるので二十九番松尾寺馬頭観音と判断した。

三段中央に三面石仏が二体あり。上部に九番と十一番の刻銘が読み取れる。

## 2、西国三十三所観音

観世音菩薩は三十三種の変化身でこの世に示現すると『法華経普門品』に説かれるところから、観世音菩薩を本尊として祀る三十三寺を巡礼する者は功徳が得られると信じられた。

西国三十三所の観音を調べてみると、千手観音が十七寺、如輪観音が六寺、十一面観音が五寺、聖観音が二寺、馬頭観音・准胝観音・不空羂索観音が各一寺である。いわゆる七観音の一つを本尊としている。野外は石像で屋内は石像か木像で構成され三十三基造立されている。『日本石仏事典』

## 3、六観音・七観音

真言系教義では千手観音、聖観音、十一面観音、如意輪観音、准胝観音の六観音で、天台系教義では千手観音、聖観音、十一面観音、如意輪観音、不空羂索観音とする。准胝観音と不空羂索観音を配し七観音とする場合もある。

## 4、准胝観音・不空絹索観音・　馬頭観音

参考文献『復刻佛神霊像圖彙　仏たちの系譜』伊藤武美

・准胝観音

人間界に交わり衆生の惑業を破り、延命除災救児の諸願を救済する観音である。

像容は三目六臂が普通で、宝冠に一化身を頂いている。

一手は合掌し、他の手にはさまざまの持物をとる。

・不空絹索観音

不空絹索観音は、准胝観音にかわって六観音となったり、六観音に加わり七観音などにもなる。観音菩薩の変化身ともいわれる。網を張り鳥を捕え、糸をたれ魚を釣るように煩悩に迷える衆生を救済する菩薩である。像容はさまざまで異像が多い。図彙は三面八臂で、第一手は合掌し、他の手には様々の持物をとる。

・馬頭観音

頭上に馬頭を頂き、畜生道の尊として信仰され、観世音の化身で煩悩を断じる功徳がある。忿怒相で、石仏では馬の病気と交通安全を祈願する。

一面二臂、三面八臂、像容は種々ある。斧鉞、金剛杵、弓箭などの武器を持ち、二手は根本印を結ぶ。

## 5、三面多臂の由来

「准胝観音」の成立背景にテュンダー陀羅尼という聖句があり、修行者が深い瞑想のなかで、この陀羅尼を唱えると、それが尊像のかたちとなって眼前に独尊で一面四臂、一面二臂、三面二十六臂の姿が現れたという。

「不空羂索観音」は梵名をアモーガ・パーシャといい、アモーガを不空、バーシャを羂索と訳し不空羂索と称している。この観音が初訳の「不空羂索呪経」以来、その画像において大自在天すなわちヒンズー経のシヴァ神、ブラフマー神などの多面多臂の姿を取り入れたと推定される。

日本の不空羂索、准胝観音は後世に「准」を不空の意とし「胝」を羂索に当てて二尊同体とする説もある。

参考文献『日本の美術№３８２不空羂索・准胝観音像』

芦峅寺閻魔堂前の三十三所観音の「不空羂索観音」「准胝観音」もこれを製作した石工が二尊同体と考えて三面多臂石仏にしたのかもしれない。

全国の三十三所観音の本尊一致率を調査しておられる広瀬茂氏は三面の准胝観音は複数箇所あるといわれている。

芦峅寺閻魔堂前石仏群

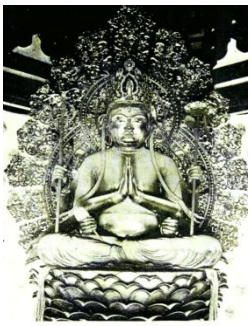
第十一番

第十一番

第九番

第廿九番

大悲大慈
西国三十三所観音粲成



西国巡礼
三十三所めぐり

# 移動明王

## 富山県南砺市の神社の不動明王

滝本 やすし

**はじめに**

富山県南砺市の神社の不動明王に関しては、尾田武雄氏により会報第66号に「お宮さんに不動明王が鎮座される」として報告されている。いくつかの不動明王については以前より移動されていることを確認していたが、他の不動明王についても調査を行った。調査対象は「神社境内に建てられている」、「以前は神社境内に建てられていた」、「神社が祭礼等に関与している」、「以前は神社が祭礼等に関与していた」のいずれかの条件を満たす石造不動明王とした。また、神社の近くに建てられている不動明王についても確認のため調査を行った。

旧南山見村は真言系の修験山伏が多く居住していた地域であり、石造不動明王の造立数が多い。神社境内にみられる不動明王もこの地域に集中しており、隣接していた地域にも若干数みられる。この地域は真言系の修験山伏が多く居住していた地域ゆえに、明治初頭の廃仏毀釈が特に強行された。山見八幡宮や井波八幡宮でも多くの仏像が受難に遭ったと伝えられる。

いつ頃から神社境内に不動明王が建てられたのであろうか。最初の造立地やその後の移動などについて、文献資料の確認や現地での聞き取りを主体に調査を行った。

**①旧井波町山見八幡宮境外参道脇**

近くの薮田清水に造立された。その後清水が使用されなくなったため、八幡宮境内参道へ移された。昭和初期、境内への通行の妨げになるため境外参道の現在とは別の場所へ移された。さらに昭和五十年頃、道路拡張に伴い境外参道脇の現在地へ移された。

以前は山見八幡宮の山森宮司により神式祭礼が行われていたが、現在は行われていない。木造祠内、浮彫り座像。施錠されているため銘文未確認。

**②旧山野村岩屋古宮（神明宮跡地）**

明治初期に庄川の河原で発見され、神明宮境内へ持ち込まれたと伝えられている。明治四十二年、近隣六ヶ村の神社合祀に伴い、神明宮は山斐神社に合祀されたが、不動明王はそのまま残された。明治四十五年、神明宮の御神木であった大杉の東側に祠を建て納められた。昭和十二年、大杉の西側へ移された。さらに昭和四十八年、区画整理に伴い現在地へ移された。

以前は神式祭礼が行われていたが、近年途絶えた。木造祠内、浮彫り座像。銘文なし。

**③旧南山見村今里神明宮境内**

集落内の四ツ辻に造立された。明治時代の村道新設の際にも、特に移動はなかったと思われる。昭和五十三年頃、区画整理に伴い現在地へ移された。

井波八幡宮の綿貫宮司により、神社の祭礼時に併せて神式祭礼が行われている。露座、浮彫り座像。右側面「慶應二丙寅年正月／井波石工七次郎」。

**④旧南山見村川原崎天満宮境内**

造立地不明。昭和五十三年頃の区画整理に伴い現在地へ移されたと考えられるが、記録や伝承を確認できない。

井波八幡宮の綿貫宮司により、神社の祭礼時に併せて神式祭礼が行われている。露座、浮彫り座像。左側面「明治十三年辰三月」。

**⑤旧南山見村谷大森神社境内**

現在地から数十メートル西の大森神社境外参道脇に造立された。昭和後期の区画整理に伴い現在地へ移された。

井波八幡宮の綿貫宮司により、神社の祭礼時に併せて神式祭礼が行われている。露座、浮彫り座像。右側面「明治二十年八月建■」。

**⑥旧南山見村連代寺路傍**

現在地から二十メートルほど西の矢於留神社旧境外参道脇に造立された。昭和三十四年、区画整理に伴い現在地へ移された。

井波八幡宮の綿貫宮司により、神社の祭礼時に併せて神式祭礼が行われている。木造祠内、浮彫り座像。右側面「明治廿一年十一月■…」。

**⑦旧南山見村東城寺八幡社境内**

集落外れの山中に造立された。この場所は明治十一年に現在地へ遷座された旧八幡社跡地付近である。その後八幡社境内東側へ移され、さらに境内整備に伴い境内西側の現在地へ移された。

井口神明宮の井頭宮司により、神社の祭礼時に併せて神式祭礼が行われている。露座、浮彫り座像。右側面「明治廿八年乙未三月建之／作者森川栄次郎」。

**⑧旧南山見村沖神明社境内**

現在地から二十メートルほど西の神明社境外参道脇に造立された。神社の裏を流れる河川が頻繁に氾濫するため、昭和五十年頃に河川は神社前へ移設された。それに伴い、現在河川がある位置に建てられていた不動明王は現在地へ移された。その際、境内の入り口に建てられていた社号標柱と共に、石積の基壇上に並べられた。

以前は院瀬見の浄土真宗本願寺派善休寺により仏式の講が行われていたが現在は行われていない。露座、浮彫り座像。左側面「明治二十九年九月建之子供連中」。裏面「森川作」。

**⑨旧広塚村石田立山社境内**

近くの路傍に造立され、その後現在地へ移されたとされるが、確かな記録や伝承を確認できない。

現在は祭礼や講などは行われていない。露座、浮彫り座像。正面下部「願主髙﨑藤三郎」。左側面「大正五年十二月二十四日建之／世話方惣連中／■■成■」。

**⑩旧高瀬村雨潜神明宮境内**

造立地不明。移動されているが詳細不明。

寺家日吉社の渡貫宮司により、神社の祭礼時に併せて神式祭礼が行われている。木造祠内、一石一尊の不動三尊。不動明王は浮彫り座像、脇侍二体は浮彫り立像。不動明王裏面に俳句。制吒迦童子左側面「石工金屋／栄次郎」。衿迦羅童子裏面「慶應二丙／寅季夏」。

**⑪旧北山田村高畠公民館駐車場**

造立地不明。以前は諏訪社境内に建てられていたが、平成三十年頃に現在地へ移された。

祭礼や講などが行われているかは不明。露座、浮彫り座像。右側面「明治三十七年四月建之／世話方若連中／上ハナ石工岩城竹吉」。

**おわりに**

旧山野村高屋古宮（神明社跡地）および旧山野村軸屋古宮（神明社跡地）にも石造不動明王がみられるが、いずれも神社が現在地へ遷座された後に不動明王が造立されている。これらは近隣寺院により開眼法要が行われ、その後の講も行われており、神社の関与はみられない。

旧井口村川上中神明社石段脇に不動明王が建てられているが、この場所は集落共有地であり、神社は不動明王に関与していない。蛇喰の浄土真宗本願寺派正覚寺により、仏式の講が行われている。旧蓑谷村西明の西明神社近くにも不動明王が建てられているが、こちらは西明の真宗大谷派浄円寺により仏式の講が行われている。南砺市には他にも神社近くに建てられている不動明王がいくつかみられるが、神社が関与しているものは他に確認していない。

神社境内に建てられている不動明王は、おそらく全てが後に他所から移されたもので、その主な要因は区画整理であった。動かないから不動明王と称されるのであるが、これだけ動かされていては不動明王ではなく移動明王であろう。それにしても仏像である不動明王が神社入り口に建てられているのが自然に見えるのは、蓮座ではなく岩座によるものなのかもしれない。

**参考資料**

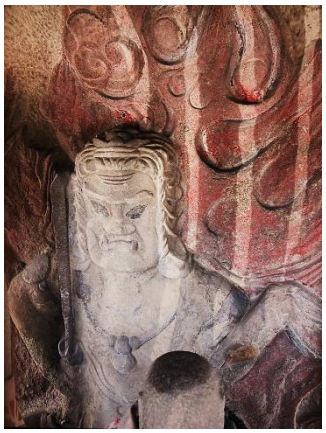
『井波の石仏とお堂　第一集』井波町教育委員会
『井波の石仏とお堂　第二集』井波町教育委員会
「神社に坐る不動明王たち」西田栄一　『日本の石仏　第96号』日本石仏協会より
「お宮さんに不動明王が鎮座される」尾田武雄　『北陸石仏の会会報　第66号』より
『南砺市郷土Wiki』

神社境内に建てられている不動明王 今里神明宮

④川原崎天満宮境内

③今里神明宮境内

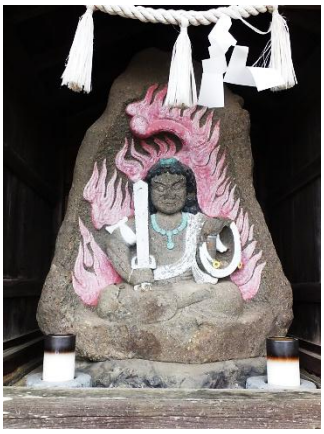
②岩屋古宮（神明宮跡地）



①山見八幡宮境外参道脇

⑧沖神明社境内

⑦東城寺八幡社境内



⑥連代寺路傍

⑤谷大森神社境内

⑪高畠公民館駐車場

⑩雨潜神明宮境内

⑨石田立山社境内

# 第63回例会報告（能登甘田の石仏めぐり）

白江　秋広（砺波市）

「北陸石仏の会」の10月2日の例会に参加いたしました。

能登地方は、以前から中世石造物の宝庫として広く知られていますが、現地を訪れ実物にお目見えすると、さすがに多様な石造物群に圧倒されました。

日帰りコースで13カ所を巡りましたが、①名号（題目）塔、②笠塔婆、③板碑（種子、陽刻、線刻）、④五輪塔、⑤如来形仏、⑥地蔵、⑦その他（石積六体地蔵石幢、鬼、灯篭、不動明王、双体如来等）を拝見しました。自分の記憶と当日の写真記録を合わせてみると、約77体（残欠も含む）を見たことになりますが、特に気になったことを述べたいと思います。

**その１　法華宗に係る遺構**―日蓮宗の妙成寺（中世～）や本成寺が現存しており、法華経の題目塔がいくつも残されていること―私の住む砺波地方では浄土真宗一色に染められ、近世以降に「南無阿弥陀仏」の名号塔が建てられたが、法華宗の遺構は見当たらない。砺波地方の中世の有力土豪であった木船城の石黒左近や庄川壇之城に拠る石黒氏は法華門徒であったが、それぞれ織田信長の謀殺や一向一揆の圧迫によって没落し、法華宗の気配のある記憶がほとんど残されていない。能登では、永仁2年に日像によって日蓮宗が弘通されたと伝え、志賀町福野「妙法蓮華経碑」（正安4年5月）を嚆矢として、以降連綿と受け継がれてきたのであろう。

**その２　記年銘のある板碑**―志賀町には、記年銘の有る板碑が3基あります。

一つは、「正應4年大日板碑」―北陸地方に現存する最古の在銘板碑（共同墓地）、

二つは、「永仁7年大日板碑」―薬研彫のくっきりした「バン」に蓮座を添えた優品（志賀町保管）

三つは、「一字金輪板碑」―一字金輪の種子・「ボローン」を初めて見ました。種子を円相・火焔・蓮座で荘厳祖装飾した丁寧な作り。嘉暦2年の銘有り。

永仁７年大日板碑

妙法蓮華経碑

**その３　石積六角地蔵石幢**―これはまたユニークな石幢です。東を向いている意富志麻神社の参道を通って本殿を過ぎると、境内の西側には日本海が広がっている。陸と海とが両方見渡せる位置に、六角形に切り石が積み上げられた石塔があり、六面それぞれに地蔵がはめ込まれている(現在一面のみは五輪塔陽刻板碑)。四方八方からの災厄を六体の地蔵尊が防いでいるのであろうか。

伝承も含めて、海の交流が盛んな能登ならではの石塔というべき

終わりに、今回の「石仏めぐり」に初参加いたしましたが、盛り沢山なメニューにも拘らずあくせく感がなく、それぞれの場所でゆったりした時間の中で見学ができました。名ナビゲーター・滝本さんの巧みな誘導によるものと感謝いたします。

妙成寺五重塔前にて記念撮影

石積六角地蔵石幢前にて記念撮影

令和５年度の会費を同封の振替用紙にて納めてください。年会費は３０００円です。